

## 第30回日本疫学会学術総会を終えて

京都大学大学院医学研究科 社会健康医学系専攻健康情報学分野  
中山 健夫

このたび第30回学術総会－メインテーマ「疫学と隣り合う諸科学：共にさらなる発展を」－を2020年2月20日～22日に京都大学百周年時計台記念館、国際科学イノベーション棟で開催させていただきました。本稿を執筆している2020年3月18日、新型コロナウイルスのパンデミック、それに由来するCOVID-19に社会が大きく揺られています。3月以降に予定されていた学会はほぼ中止または紙上開催へ変更の判断がされました。本学術総会も1週間遅ければ、そのようにせざるを得なかったことと思います。以下、本学術総会の経緯の概略をご報告いたします。

1/31頃から中国等からのゲストの来日キャンセルと海外からの開催可否の問い合わせあり、開催の方向と回答。

2/7 ベトナムの参加者より、保健当局から医療従事者の海外渡航制限が指示されたことによるキャンセル。その時期、事前参加登録に関する返金ポリシー等を総会事務局内で検討し、原則返金しない方針で了解。国・行政・所属機関の指示等により参加が不可能となった場合は、例外として検討の余地を残す。

2/13頃から、海外（米国、韓国等）、国内からの参加者のキャンセルあり。

事前参加登録時に総会ホームページに記載していた内容「事前参加登録費・疫学セミナー参加費・懇親会費は、お支払い完了以降、理由の如何に関わらず返金いたしかねます」という方針の維持を決定。ただし参加キャンセルに伴う代理発表は認める。

2/16 井上真奈美理事、JEA-IEA WP joint symposium in Kyotoの延期決定。

2/18 理事会MLで栗山進一理事から日本災害医学会（神戸）に関する情報

提供あり、それを受けて以下を提案。2/19にかけ同意のレスポンス多。

・総会は予定通り開催 ・2月21日（金）の懇親会は中止（返金あり）・総会ホームページで注意喚起

若手の会の担当から、「若手の集い」中止決定の連絡あり。

2/19 総会ホームページで告知と注意喚起。理事会MLで栗山理事よりキャンセルとなったJEA-IEA WP joint symposium枠を使った企画の提案あり、2/20にかけ企画（特別集会）の具体化。

### CONTENTS

第30回日本疫学会学術総会を終えて ..... 中山 健夫 1	第5回疫学の未来を語る若手の会合開催報告 ..... 永井 雅人 6
疫学セミナー『多施設共同コホート研究の運営と成果発表：JACC Studyの経験に学ぶ』報告 ..... 玉腰 暁子 2	一般社団法人日本疫学会 各種賞の贈呈 ..... 8
日本疫学会プレセミナー2020開催報告 ..... 本庄 かおり 3	奨励賞を受賞して ..... 奥村 泰之 8
シンポジウム 社会医学系4学会医学系学会・AMED合同企画「ライフコース疫学基盤の構築と臨床研究への貢献」のご報告 ..... 中山 健夫 4	奨励賞を受賞して ～周産期薬剤疫学研究の実現に向けて～ ..... 小原 拓 8
メディア連携WG企画シンポジウム「疫学研究成果を広く正しく国民に還元する：如何にメディアと連携するか？」開催報告 ..... 金子 聡 5	奨励賞を受賞して ..... 村山 洋史 9
特別集会「コロナ肺炎にそれぞれが向き合うために」の報告 ..... 中山 健夫 5	日本疫学会奨励賞を受賞して ..... 目時 弘仁 10
幻の第25回疫学の未来を語る若手の集い ..... 福井 敬祐 6	特集 グローバルヘルスと疫学 地球温暖化と疫学 ..... 橋爪 真弘 11
	国際保健と社会疫学 ..... 野中 大輔 12
	疫学専門家が認定されました ..... 尾島 俊之 13
	事務局だより ..... 13
	編集後記 ..... 14

2/20 厚生労働省より「イベントの開催に関する国民の皆様へのメッセージ」発出（開催の必要性を改めて検討。現時点で政府として一律の自粛要請を行うものではない）

総会ホームページ（2/21）、疫学会通信（No.208、2/20）にて特別集会開催の告知、総会会場にアルコール消毒薬の配置。

…以上のように切迫した状況での開催決定・運営となりました。

学術総会自体は、20日の疫学セミナーで「多施設共同コホート研究の運営と成果発表：JACC Studyの経験に学ぶ」、プレセミナーでは「QOL評価の活用方法・疫学研究における身体活動評価入門・疫学×Python」、21日は「メインシンポジウム・疫学と隣り合う諸科学：共にさらなる発展を」「ランチョンセミナー1（協賛・JMDC）」、社会医学系4学会・AMED合同企画シンポジウム「ライフコース疫学基盤の構築と臨床研究への貢献」、22日は「シンポジウム：データベースの疫学的活用」「ランチョンセミナー2（協賛・三菱総合研究所）」「シンポジウム：疫学におけるバイオバンクの利活

用」「シンポジウム：メディアとの連携WG」、そして特別集会「コロナ肺炎にそれぞれが向き合うために」に至るまで、演者・座長の皆様のお力でいずれも大変密度の濃いセッションとなりました。なお優秀演題として6候補から、ハイレベルの接戦で錦織達人先生（京都大学）、池田奈由先生（医薬基盤・健康・栄養研究所）が選出されました。

例年と大きく異なる緊張感の中での3日間でしたが、皆様から本当に多くのご支援、激励をいただき、会期を終えられたこと、本当に感謝の言葉がありません。参加者数は1,146名、一般演題数は393題（口演41題、ポスター352題）で、いずれも過去最多でした。このような事態で参加者が予想を超えたのは、疫学専門家認定制度、社会医学専門医制度との連携の影響が大きかったものと思われま。学術総会の全プログラ

ム後に、第1回疫学専門家試験が行われ、こちらも無事終了したとうかがっております。今回をスタートに本制度が軌道に乗っていくことを祈念しております。

学術総会は、皆様のお力添えで、何とか終わることができました。本当にどうもありがとうございました。とはいえ、COVID-19問題は進行中で、今まさに疫学・公衆衛生、そして社会の力が問われている状況にあります。本稿が、学会・学術総会運営の何らかの参考になることを願い、ご報告とさせていただきます。



## 疫学セミナー『多施設共同コホート研究の運営と成果発表：JACC Studyの経験に学ぶ』報告

北海道大学大学院医学研究院  
玉腰 暁子

第30回疫学会学術総会の初日に、疫学セミナーの形で、JACC Studyを振り



返しその成果を共有するシンポジウムを開催しました。JACC Studyはちょうど疫学会の発足時期に重なる1988-90年に開始された多施設共同コホート研究です。最近の疫学セミナーは、新しい概念や解析方法を学ぶ形が多かったため、どれだけの方にお越しいただけるか大変心配しましたが、391名に参加いただき、ほぼ休憩なしで2時間半、意見交換も含めて行えましたことに

心より感謝申し上げます。

当日は、成果発表のみならず、全国の多くの疫学者、公衆衛生学者に呼びかけてJACC Studyを開始された青木國雄先生、ともに研究を進められた吉村健清先生のお話を、開始時から現在に至るまで関わられた渡邊能行先生にまとめていただく形で座談会を設けることができました（少し離れた立ち位置で研究を支援された富永祐民先生に当日ご都合で参加いただけなかったのは残

念でした)。参加された若い方々に、疫学がどのように研究者コミュニティに認知されていったのか、どうやって1つの大型研究が始められるのか、考えていただく機会になったことと存じます。

JACC Studyは追跡を終了しましたが、現在も関係者が解析、発表を続けています。さらに、セミナー直前に、調査項目が標準とは一部異なる地域の対象者を除いた80,365名のデータを東

京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センター(SSJDA)に寄託し、利用可能となりました。このことにより、データの散逸を防ぐのみならず、大規模データを用いた疫学教育に資すること、新たな視点からの研究が行われることを期待しています。



セミナー終了後 右より吉村健清先生、青木國雄先生、渡邊能行先生

## 日本疫学会プレセミナー2020 開催報告

大阪医科大学  
本庄 かおり

第30回日本疫学会学術総会(2020年2月、京都)において、「日本疫学会プレセミナー」を初めて開催しました。本企画は、日本疫学会会員の人材育成・研究力の向上に資するセミナーや演習の機会の提供を目的に実施しました。

日本疫学会プレセミナー実施にあたっては、日本疫学会の会員からセミナー企画・実施者を広く公募しました。申請のあった企画の中から、疫学専門家・人材育成委員会 疫学教育推進WGにより、下記の企画が選定され、参加者が募集されました。

### 企画1. QOL評価の活用方法： Minimally Important Difference (MID) の観点から

【企画者】

宮崎 貴久子

(京都大学大学院 医学研究科)

【参加人数】96名

### 企画2. 疫学研究における身体活動評価入門

【企画者】

門間 陽樹

(東北大学大学院医学系研究科)

【参加人数】82名

### 企画3. 疫学×Python：ワークショップ

【企画者】

後藤 温、梅沢 淳

(国立がん研究センター社会と健康研究センター)

【参加人数】60名

参加者募集の直後から多くの希望者があり、みなさまの関心の高さが伺えました。また、当日の参加者アンケートからは「実践的なことや基本的なことを先駆者から直接学べ、質問できる機会を増やしてくれるので若手育成や共同研究の推進に良い

機会である」、「これまであまり馴染みのなかった分野を、ある程度まとめて学べる」という意見が寄せられました。

企画を実施してくださった先生方、また、第30回日本疫学会学術総会中山健夫会長ならびに事務局には大変お世話になりました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。ありがとうございます。



# シンポジウム 社会医学系4学会医学系学会・AMED合同企画「ライフコース疫学基盤の構築と臨床研究への貢献」のご報告

京都大学大学院医学研究科 社会健康医学系専攻健康情報学分野  
中山 健夫

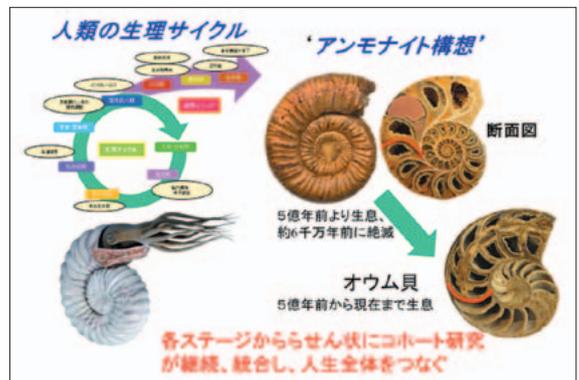
本企画は、2018年から継続されている社会医学系4学会(日本衛生学会、日本公衆衛生学会、日本産業衛生学会、日本疫学会)と日本医療研究開発機構(AMED)の末松誠理事長との懇談会を基点に、日本衛生学会の大槻剛巳理事長から頂いたご発案が実現したものです。4医学会による共催、AMEDから協力を頂きました。末松理事長からは、「ポピュレーションコホート等を活用した多因子疾患の予防、早期診断、治療最適化に資する研究」についての、研究側のビジョンや実際の取り組みに関する問いかけを頂き、それに社会医学の各領域の演者が答え、共に将来構想を創り出す大変貴重なシンポジウムとなりました。

座長は日本衛生学会・大槻剛巳理事長(川崎医科大学)、日本公衆衛生学会・磯博康理事長(大阪大学)、そして中山が務め、まずライフコースに沿った個別の研究の概要と課題として、次の先生方にご講演を頂きました

(敬称略)。

1. 出生前後・小児・児童：エコチル調査 出生コホート 山縣然太郎 (山梨大学)
2. 成人～壮・中年：企業勤務者コホート 溝上哲也(国立国際医療研究センター)
3. 成人～壮・中年：実験系社会医学研究 大槻剛巳(川崎医科大学)
4. 壮・中年～高齢：JPHC・JPCH-NEXTコホート 津金昌一郎(国立がん研究センター)
5. 高齢：JAGES(-NEXT) コホート 近藤克則(千葉大学予防医学センター／国立長寿医療研究センター)
6. 高齢：医療介護データベース・コホート研究 田宮菜奈子(筑波大学)

続いて末松理事長の基調講演を頂き、人間のライフコースを対象とする日本の社会医学のビジョンについて大変活発な意見交換が行われました。図は同じ属の貝でありながら絶滅したアンモナイトと、連続的な内部構造を持って現在も生き残っているオウム貝です。構造が各ライフステージからコホート研究が立ち上がり、それらが「らせん状」につながって、人生すべてを網羅する未来型社会医学プロジェクトのイメージとして、「アンモナイト構想(または今でも生き残っている「オウム貝」構想)」として、磯博康先生にご提案いただきました。紙面をお借りして、ご紹介させていただきます。第30回の節目となる本学術総会において、このように有意義なシンポジウムが開催されたことに感慨を深めております。AMED末松理事長、各学会の先生方、関係各位に心より感謝を申し上げます。



# メディア連携WG企画シンポジウム 「疫学研究成果を広く正しく国民に還元する： 如何にメディアと連携するか？」開催報告

広報委員会メディア連携WG  
金子 聡

広報委員会メディア連携ワーキンググループ(WG)は、「日本疫学会将来構想検討委員会報告書」の活動方針に従い、メディアとの連携を促進するための企画を検討しております。その活動をさらに効率的に実施するためには、やはり、メディアについての知識を深めることが必要です。メディアをよく知り、その連携を考えることをコンセプトに、本シンポジウムを開催いたしました。メディアについての知識・経験が豊富な福島県立医科大学特命教授(広報コミュニケーション室長)の松井史郎先生をお招きし、「コミュニケーションのためのメディアとの連携、構築」というタイトルでお話しして頂きました。メディアの分類という

基礎的な知識からマスメディアとの連携、Owned Mediaを利用したメディアの整備、最後に、ソーシャルメディアへの対応という流れで、わかりやすくメディアについての説明をして頂きました。講演の最後には、「ターゲット」と「目的」の明確化(=何を誰に対してどこまで到達させることがゴールなのかを組織として決め、共有すること)、目的と段階に応じた複数手段の使い分け(=目的は多岐に亘ることあることから、ゴールまでの道筋を何段階かに分けて情報発信する戦略を立案すること)の2点をTake-Homeメッセージとして頂きました。シンポジウムでのトークセッションでは、多くの意見が交わされました。今後、メディ

アとの連携とメディアの構築に向けて、疫学会としての戦略を検討して参りたいと思います。疫学会員の皆様におかれましては、本学会ホームページのコンテンツの充実等、ご協力をお願いすることもあるかと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。



松井史郎先生

## 特別集会「コロナ肺炎にそれぞれが 向き合うために」の報告

京都大学大学院医学研究科 社会健康医学系専攻健康情報学分野  
中山 健夫



日 時：2020年2月22日(土) 9：30～11：45 (予定を15分延長)  
場 所：第3会場 (国際科学イノベーション棟 5F シンポジウムホール)  
座 長：栗山 進一 (東北大学)・中山 健夫 (京都大学)  
演 者：水本 憲治 (京都大学大学院総合生存学館特定助教)  
指定発言：井村 春樹 (京都大学/尼崎医療生協病院 感染症専門医)

本集会は、新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い中止された、シンポジウム3「国際化推進委員会企画」の枠で急遽開催されたものです。まず集会

の目的は「学会としての見解や一定の結論を得る場ではなく、フロアとの双方性の討議の場」である旨を説明し、中山が「コロナ肺炎にそれぞれが向き合うた

めに」と題して2009年の新型インフルエンザの経験と“infodemic”への言及、続いて栗山先生から「疫学からみたコロナウイルス感染症」と題して疫学者の

役割について講演をいただきました。この時点で会場後方に多くの方が立ち見となってしまったため、席を詰めていただく旨のアナウンスを行いました。

水本先生からは、感染症疫学の基本知識から、SARS、MERS、エボラ、そして新型コロナウイルスを含めた、近現代に流行した感染症を概観する講演をいただきました。井村先生は、現場の専門医の立場から、新型コロナウイ

ルスの臨床像、実際に行われている準備と対策の紹介、現場が疲弊し始めている状況を鑑み、今後の蔓延期に向けた疫学会としての現場への支援を呼びかけられました。総合討論では、水本先生から「研究を遂行するために、是非ご協力いただきたい」との疫学会への協力要請、井村先生は「(現場に負担を増やす) 検査の絶対視はしないほしい」との発言がありました。

予定していた時間を延長して非常に活発な議論が行われ、感染症疫学の正しいデータ分析とその解釈、臨床現場の経験・事実に基づく発信、いずれも大切であることが改めて強調された貴重な機会となりました。新型コロナウイルスに対する「それぞれの立場」での取り組みと、お互いの協力関係が、このパンデミックを収束させていくことを信じ、以上報告させていただきます。

## 幻の第25回疫学の未来を語る若手の集い

大阪医科大学 研究支援センター 医療統計室  
福井 敬祐

令和2年2月20日に開催を予定しておりました第25回疫学の未来を語る若手の集いは、昨今流行しております新型コロナウイルスの流行を受け、残念ながら中止の判断をいたしました。

今回の疫学の未来を語る若手の集いにおきましては、「若手研究者のキャリアプランを考えよう」と題しまして、ワールド・カフェ方式の討論を計画いたしました。ワールド・カフェ方式とは、カフェにいるかのように少人数のグループでフランクに意見を出し合い、お互いの意見や思いを共有し、相互理解を深める討論方式です。今回の

題材は、将来の先行きが見え難い若手が共通に抱えている課題ではないかということで、上司・指導教官や先輩にも相談できないような日頃の些細な不安を若手同士で議論できる場を提供しようという思いで設定いたしました。

具体的に集いで取り上げて欲しい内容を事前に参加者から集めましたところ、「どのように進学・就職していくのか」、「私生活と研究・仕事のバランスをどのようにとればよいか」、「どのように研究課題を見つけていくのか」、「上司との付き合い方」など多種多様な意見が挙げられ、改めて、若手研究

者の方のキャリアプランに対する思いの深さと、その思いを共有することの必要性を認識しました。

疫学の未来を語る若手の会のHP (URL: <https://jeaweb.jp/youth/index.html>) にも記載がありますが、本会は「若手疫学者が集い、意見を交換し、将来を語り、そしてたまに酒を飲むこと」を目的としています。疫学の未来を語る若手の会では若手疫学者同士の交流と議論の場を積極的に提供できるよう様々なイベントの企画を行って参ります。今後是非ご支援・ご参加の程よろしくお願いいたします。

## 第5回疫学の未来を語る若手の会合宿開催報告

千葉大学 予防医学センター  
永井 雅人

令和元年11月16～17日、長野県軽井沢市のリゾートイングリーン軽井沢にて、第5回疫学若手の会合宿を開催いたしました。「疫学の未来を語る若手

の会」では、若手同士の交流の場と疫学の学習機会の提供を目的として1泊2日の合宿を開催しています。

第5回目となる今回は、「AIによる

データ分析」をテーマとしました。合宿の構成は講義と演習とし、講師には、内田満夫先生(群馬大学)と川上英良先生(国立研究開発法人理化学研究所

／千葉大学)、ティーチングアシスタントとして石川哲朗先生(国立研究開発法人理化学研究所)をお迎えしました。1日目は、川上先生、石川先生より機械学習を用いたデータ駆動型医学研究について、その歴史的背景や機械学習手法、機械学習を行うためのデータの下処理や可視化について、ご自身の最新の研究成果も交えてご講義頂きました。その後、内田先生より、社会医学研究におけるAIの活用について、産業保健での応用例についてご紹介頂

きました。2日目は、Rを用いた解析演習を行い、続いて世話人の原田成先生(慶應義塾大学)、永井よりそれぞれ機械学習を用いた疫学研究の紹介をいたしました。また、1日目の夜には懇親会を、2日目の午後にはエクスカッションを行い、親睦を深めました。

合宿後のアンケートでは、機械学習について全体像が分かった、最新の知見が得られた等の声がありました。今回の合宿が、若手の皆様の知識向上と新しい仲間との出会いの場となり、今

後疫学会でもAIを用いた研究が増えてくることを期待します。疫学会の諸先生におかれましては、ご協力をお願いすることがあると存じます。その際にはご助力頂けると幸いです。



## 一般社団法人 日本疫学会 各種賞の贈呈

第30回日本疫学会学術総会において下記のとおり、各種賞の贈呈が行われました(五十音順、敬称略)。

### 功労賞



津金 昌一郎 祖父江 友孝 理事長  
(国立がん研究センター)

### 奨励賞

奥村 泰之(東京都医学総合研究所)  
小原 拓(東北大学東北メディカル・メガバンク機構)  
西浦 博(北海道大学)  
村山 洋史(東京大学高齢社会総合研究機構)  
目時 弘仁(東北医科薬科大学)

### Best Reviewer賞



久保田 康彦  
(大阪がん循環器病(和歌山県立医科大学) 予防センター)



藤吉 朗  
(和歌山県立医科大学)



和田 恵子  
(岐阜大学)

### Paper of the Year

田中 宏和(エラスムス大学医療センター)  
“Geographic Access to Cancer Treatment in Japan: Results From a Combined Dataset of the Patient Survey and the Survey of Medical Institutions in 2011”  
DOI:<https://doi.org/10.2188/jea.JE20170051>



### Travel Grants Winners



写真左から、井上 真奈美 国際化推進委員会委員長、  
Seung-Won Lee (Sejong University, Korea)、  
Md Rifat Anam (Global Public Health Research Foundation, Bangladesh)、  
祖父江 友孝 理事長

奨励賞を受賞された奥村先生、小原先生、村山先生、目時先生に受賞の喜びや今後の抱負について寄稿いただきました。なお、西浦先生は、新型コロナウイルスのクラスター対策班でご対応中のため、ご執筆は次号以降に依頼いたします。

## 奨励賞を受賞して

臨床疫学研究推進機構  
奥村 泰之



このたびは、栄誉ある日本疫学会奨励賞を賜りましたこと、心より光栄に存じ、ご支援下さいました学会員の皆様に御礼申し上げます。

私が研究に興味を持ったのは、大学3年生のときでした。「効果のある心理療法って何か知りたいなあ」と思ったのがきっかけでした。卒業論文では、メタ・アナリシスWebデータベース開発という、心理学系の学生としては著しく方向性を誤ったテーマに没頭しました。

その後、大学院に進学し、指導教官の坂本真士先生より、研究のイロハをご指導頂きました。また、アルバイト先であった国立保健医療科学院の長谷川敏彦先生

と種田憲一郎先生より、医療政策学の楽しさを学びました。大学院時代は、疫学・統計学への愛が常軌を逸して、寝る間を惜しんで勉強していました。

学位取得後は、研究所の研究職として就任する機会に恵まれました。そこで、上司の伊藤弘人先生より、データベース研究を推進するよう仰せつかりました。当時の私は、この研究領域に何の関心もなく、拒絶反応を示していたのですが。その後、10年近くデータベース研究に携わり、賞を授与頂くことになるとは、人生は予測できないものです。研究員時代は、疫学・統計学への愛が、より公益性の高いものへと変態して、

REQUIRE研究会という、全国から疫学修行僧が集う場ができました。

今回の受賞テーマである、レセプト情報を活用した臨床疫学研究は、多方面から関心を集めている研究領域ですが、色々な意味で課題の多い領域です。この期待先行の危うい領域を、健全に発展させるには、ひと工夫必要だろうと悩んでいました。そんな中、多くの関係者に支えて頂きながら、疫学・統計学への愛に異変が起きて、「臨床疫学研究を支援する組織を作ろう」と考え始めました。これからは、少し異なる立ち位置から、微力ながら、学問の発展に尽力したいと願っています。

### ■プロフィール

2003年3月 早稲田大学第二文学部 卒業

2013年4月 医療経済研究機構 研究員

2009年3月 日本大学大学院文学研究科 修了

2018年4月 東京都医学総合研究所 研究員

2008年11月 国立精神・神経医療研究センター 研究員

2020年4月 臨床疫学研究推進機構 代表理事

## 奨励賞を受賞して

### ～周産期薬剤疫学研究の実現に向けて～

東北大学東北メディカル・メガバンク機構 予防医学・疫学部門  
小原 拓



この度は、日本疫学会奨励賞にご選考いただき誠にありがとうございます。理事長の祖父江友孝先生をはじめ、学会長の中山健夫先生、ご推薦くださいました栗山進一先生、これまでご指導いただきました諸先生方に、心より感謝申し上げます。私は東北薬科大学薬学部を卒業後、東北大学大学院薬学研

究科臨床薬学分野に進学し、今井潤先生をはじめとする諸先生方のご指導の下、高血圧関連領域で疫学を学びました。高血圧に関する研究領域は基礎研究・臨床研究共に盛んに行われており、日本疫学会や日本高血圧学会をはじめ様々な場面で活発なディスカッションに加えさせていただいたことは、

疫学についてはもちろん、ものの考え方や人との接し方など様々なことを学ばせていただきました。医療薬学博士号を取得後は、日本学術振興会特別研究員として東北大学病院薬剤部に籍を置かせていただき、この頃から薬剤疫学研究の勉強を始め、エコチル調査の開始と当院での「妊娠と薬相談外来」

開設を機に、周産期薬剤疫学研究の基盤構築に取り組み始めました。当時は、周産期というセンシティブな領域であることや、全く基盤のない中でのスタートだったこともあり、厳しいご意見ばかりでした。そのような中、大久保孝義先生にはレセプトデータを用いた研究立案のきっかけを与えていただ

き、栗山進一先生や目時弘仁先生には、出生コホート研究の中での薬剤疫学研究の実施やレセプトデータを用いた周産期薬剤疫学研究の開始にあたり多大なご支援をいただきました。現在では、東北大学東北メディカル・メガバンク計画三世代コホート調査の中で、遺伝要因も考慮した妊娠中の医薬

品使用の安全性評価を行うべく、日々試行錯誤しております。妊娠と薬外来では、適切なエビデンスが不足しているがために悩むことがまだまだ多くありますが、今後も、その状況を少しでも改善できるような基盤構築・エビデンス創出に向け努力してまいります。

### ■プロフィール

2003年3月 東北薬科大学薬学部卒業

東北大学大学院医学系研究科分子疫学分野  
助教

2008年3月 東北大学大学院薬学研究科博士課程修了(医療薬学博士)

東北大学病院薬剤部 助教

2008年4月 日本学術振興会特別研究員PD

2013年4月 同上 講師

2012年4月 東北大学東北メディカル・メガバンク機構  
予防医学・疫学部門 助教

2015年9月 同上 准教授

## 奨励賞を受賞して

東京都健康長寿医療センター研究所  
村山 洋史



このたびは荣誉ある日本疫学会奨励賞を賜り、理事長の祖父江友孝先生、理事の先生方、大会長の中山健夫先生をはじめ、諸先生方に感謝申し上げます。

私は、学部卒業後、東大病院での看護師勤務を経て、大学院は地域看護学教室にて修士、博士課程を過ごしました。大学院時代は、疫学研究とは全くといっていいほど縁がなく、一般的な疫学用語を聞いてもほぼ理解できていない有様でした。振り返ると、自分が将来疫学研究に従事し、疫学会の奨励賞をいただくことができようとは夢にも思っていませんでした。

博士号取得後2年目で東京都健康長寿医療センター研究所（以下、研究所）に移りました。ここで初めて、新開省二先生、藤原佳典先生らのご指導のもと高齢者の疫学研究に従事することになりました。ちょっとずつ勉強していると思っていたのも束の間、1年目で鳩山コホート（埼玉県鳩山町）の立ち

上げを担当することになり、既存コホート研究の論文を読み漁ったり、知らないことも会議では分かっているふりをし、後で自分のデスクで慌てて調べたりした日々でした。しかし、あの時の経験は今の自分にとっての大きな財産になっていると感じます。

研究所に勤めて3年目の2012年、パネルデータ解析や社会疫学研究をもっと勉強したいと考え、米国ミシガン大学のJersey Liang先生のもとに留学をさせていただきました。留学中は、BMIや喫煙状況等の健康行動の加齢変化とその社会的決定要因といったテーマで研究を進めました。Liang先生は社会学をバックグラウンドとしており、研究対象の捉え方一つとっても、これまでの自分の方法とは異なることが多く、非常に刺激的でした。

帰国後も、色々なコホートの運営や立ち上げに関わる機会をいただきました。受賞テーマである「地域特性の違いに着目した高齢期の社会疫学研

究」は、全国各地での多くの疫学調査に関与させていただけたからこそ探求できたものだと思っています。

私は、様々なバックグラウンドを持つ研究者が集まり、協力しながら研究を作り上げていくところに疫学研究の魅力を感じます。社会疫学研究は、曝露要因である社会的変数に主な関心があります。しかしそれは、色々な専門の先生方がアイデアを出し、緻密な研究デザインのもとできっちりとアウトカムや共変量が測定され、初めて成り立ちます。あらためて、共同研究者の先生方に感謝いたします。

社会疫学研究の知見は、世の政策や実践活動に活かされてこそだと思っています。社会格差対策、地域包括ケアシステム、高齢者雇用など、社会疫学研究が貢献できるトピックは数え切れません。これからも社会に生きる成果を出せるよう、精進して参りたいと思います。今後ともご指導、ご鞭撻のほど、よろしくお願いいたします。

■プロフィール

2002年3月	東京大学医学部健康科学・看護学科卒業	2015年4月	東京大学高齢社会総合研究機構・特任講師
2006年3月	東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻修士課程修了	2018年3月	帝京大学大学院公衆衛生学研究科専門職学位課程修了
2009年3月	同博士課程修了	2020年4月	東京都健康長寿医療センター研究所・専門副部長
2009年4月	東京大学高齢社会総合研究機構・特任助教		
2010年4月	東京都健康長寿医療センター研究所・研究員		
2012年11月	University of Michigan School of Public Health・客員研究員(上原記念生命科学財団・ポスドクフェロー)(2014年4月まで)		

## 日本疫学会奨励賞を受賞して

東北医科薬科大学医学部衛生学・公衆衛生学教室  
目時 弘仁



このたびは荣誉ある日本疫学会奨励賞を賜り、理事長の祖父江友孝先生、学会長の中山健夫先生をはじめ、関連する諸先生方に深く御礼申し上げます。

私は東北大学医学部3年生の時の基礎修練で公衆衛生学分野に所属し、ここで久道茂先生、辻一郎先生、大久保孝義先生にお世話になり、大崎や大迫の現場にご一緒させていただきました。6年生の時には環境保健医学分野で佐藤洋先生と仲井邦彦先生にお世話になっています。当時エコチル調査につながるとは夢にも思わなかったのですがいい経験でした。

大学院は臨床薬学分野に入り、今井潤先生、大久保孝義先生、菊谷昌浩先生をはじめとする先生方に教わりつつ血圧日内変動と脳心血管疾患との関連について研究しました。曝露やアウトカム

を、より細かく精緻に分類することで、関連が明瞭になる様に感動しました。

大学院修了前に頂いた新しいテーマは妊婦の血圧に関するコホート研究です。スズキ記念病院という場も設定いただき、全く新規に立ち上げる経験をすることができました。このときには病院の先生、助産師、スタッフの方々には大変お世話になりましたし、現在も追跡調査でお世話になり続けております。

2009年には、産婦人科の八重樫伸生先生にお声がけいただき、エコチル調査の応募準備チームに入りました。有馬隆博先生、仲井邦彦先生、栗山進一先生には大変お世話になりました。県内医療機関の先生方、自治体の方々と打ち合わせも何とかこなせ、2011年1月には全国に先駆けてお声がけをすることができました。

順調に開始したエコチル調査ですが、すぐに東日本大震災が起きました。震災による中断期間中、調査再開のすべを探りつつも先生方と考え出したのが三代コホート調査になります。機構長の山本雅之先生をはじめ、両コホート室の栗山進一先生、寶澤篤先生には大変お世話になりました。またしても研究計画時点から参画することができました。

この度の日本奨励賞に推薦いただいた大久保孝義先生には心より感謝申し上げます。また、今回、受賞をすることができましたのもひとえに上記の先生方、書ききれなかった先生方、スタッフの皆さん、参加者の皆さまのおかげです。改めて御礼申し上げます。

■プロフィール

2001年	東北大学医学部卒業	2010年	東北大学大学院医学系研究科環境遺伝医学総合研究センター婦人科学分野 助教
2001年	東北大学大学院医学系研究科内科病態学講座臨床薬学分野	2012年	東北大学東北メディカル・メガバンク機構地域医療支援部門周産期医学分野 講師
2007年	東北大学大学院医学系研究科遺伝病学分野／日本学術振興会特別研究員PD	2016年	東北医科薬科大学医学部衛生学・公衆衛生学教室教授(現職)

# 特集 グローバルヘルスと疫学

今回の特集は、グローバルヘルスと疫学をテーマに、海外、特に途上国を対象とした疫学研究を展開されている東京大学の橋爪真弘先生と琉球大学の野中大輔先生にグローバルヘルスの観点から疫学についてその魅力と必要性をお伝え頂けるよう執筆を依頼いたしました。橋爪先生は、地球規模の視点から地球温暖化と疫学について、野中先生は、途上国のフィールドにおける疫学について、異なる視点ではありますが、ともに地球の問題を解決する疫学という内容で原稿を頂きました。途上国においては、日本国内では見られない健康問題も多々発生しており、そのための疫学研究の必要性は増すばかりです。日本国政府も留学生交流を積極的に展開していることから、途上国からの留学生、そして、彼らとともに実施する疫学研究もさらに増えることが予想されます。グローバルヘルス分野の疫学には、言語の問題も含め、国内で実施する調査・研究とは異なる要素も多く、本学会会員の先生方、とくに若手の疫学研究者の皆様におかれましては、是非、この異なる研究環境に飛び込み、いろいろな経験をして頂きたいと思っております。本特集をきっかけに、グローバルヘルス分野、特に途上国を対象とした疫学研究の展開、疫学研究による世界の健康問題の解決についてご関心をお持ち頂けますと幸いです。

(編集担当 金子 聡)

## 地球温暖化と疫学

東京大学大学院医学系研究科 国際保健政策学 教授  
橋爪 真弘



社会・経済のグローバル化が進み、グローバルヘルスの概念が提唱されて久しい。地球温暖化の問題は、国や地域を超えて世界規模で対応が必要となるグローバルヘルスの象徴的課題として枕詞のように例示されるが、その割に健康影響に関するエビデンスが我が国の疫学研究界において十分に認知されているとは言い難い。

進みゆく温暖化に対し有効な対策をとらなかった場合、我が国では今世紀末に年平均気温が現在に比べて約4.4℃上昇(全国平均)し、真夏日が年に平均52日余り増えると環境省が公表している。地球温暖化は、平均気温の上昇だけではなく、熱波や大雨の増加、台風の強さにも影響すると考えられている。温暖化により将来我々の健康にどのような影響が生じるのか、影響を軽減するための有効な対策は何か、などの問いに対して、疫学手法を用いて答えを探っている。

世界保健機関では、地球温暖化が現状のまま進行した場合、温暖化が進行

しなかったと仮定した場合と比べて、2030年代に年間約25万人死者が多くなると推計している。(小児の低栄養9万5,000人、マラリア6万人、下痢症4万8,000人、高齢者の熱関連死亡3万8,000人など)(WHO 2014)。とくにサハラ砂漠以南のアフリカ、南アジア地域でこうした死亡が多いと推測されている。日本では、気温上昇シナリオによらず、有効な適応策をとらない場合、多くの都道府県で今世紀末には熱関連死亡者数、熱中症搬送者数とも現在の2倍以上に増加すると推計されている。(環境省環境研究総合推進費S-8 2014年報告書)こうした推計がある一方で、我々人間社会は超過死亡を抑えるためにどこまで適応できるのか、温暖化により冬の寒さによる死亡は減るのか、など未だ十分には明らかとなっていない課題が多くある。

これまでの地球温暖化対策は、原因となる温室効果ガスの排出を削減する緩和策を中心に進められてきたが、世界が早急に緩和策に取り組んだとして

も、地球温暖化の進行を完全に制御することはできないと考えられている。そこで、その影響を最小限に抑える適応策が、緩和策に加えて重視されている。私たちの生活・行動様式の変容、温暖化の影響を軽減・抑制する技術の研究開発、防災への投資など、社会のあり方を変化する環境に合わせて調節することで、温暖化による影響を軽減する適応策を進めることが重要と考えられている。たとえば、環境省はインターネット上に熱中症予防情報サイトを設けて、日々の生活の中で熱中症を予防するためのさまざまな工夫や取り組みを紹介しているが、これも適応策の一環である。

2009年にロックストロームらが、産業革命以来の人間活動が地球環境に負荷を与え続けた結果、地球システムが不可逆的かつ急激な変化の転換点、プラネタリーバウンダリー(Planetary boundaries)を越えつつあると提唱し、後のプラネタリーヘルス(Planetary health)の概念につながった。人間の生

存基盤である地球環境や生態系の保全と人類の健康との共存を目指すプラネタリーヘルスを実現するために、疫学のできることを考えていきたい。

■プロフィール

- |       |  |       |                                 |
|-------|--|-------|---------------------------------|
| 1996年 | 日本医科大学 医学部 卒業  | 2008年 | 長崎大学 熱帯医学研究所 国際保健学 助教           |
| 2001年 | 東京大学大学院 医学系研究科 国際保健学専攻<br>修士課程 修了                          | 2012年 | 長崎大学 熱帯医学研究所 小児感染症学 教授          |
| 2003年 | 英国London School of Hygiene and Tropical<br>Medicine修士課程 修了 | 2015年 | 長崎大学 熱帯医学・グローバルヘルス研究科<br>教授(兼任) |
| 2007年 | 英国London School of Hygiene and Tropical<br>Medicine博士課程 修了 | 2019年 | 東京大学大学院 医学系研究科 国際保健政策学<br>教授    |

## 国際保健と社会疫学

琉球大学 医学部 保健学科国際地域保健学分野・准教授  
野中 大輔



国際保健とは何ぞや? 筆者も所属している日本国際保健医療学会が出版した「国際保健医療学 初版」は、国際保健(医療)学を次のように定義している。「全世界的な立場でみた場合に、健康水準、保健医療にみられる国、地域的な違いや格差が、どの程度以上であれば容認しがたいと考えるのか、さらにそれを容認できる程度まで改善するにはどのような方策があるのかを研究し、解明する学問」。要するに、国際保健学は、国間や地域間の健康格差を対象とする学問といえる。このような健康格差は、貧困、教育、社会制度、ジェンダーなどの社会経済的要因にも由来している。よって、国際保健学は、社会経済的要因による健康格差に注目する社会疫学と関係が深い分野であるといえる。

私は15年以上に渡って、ラオスでフィールドワークを行ってきた。多くの低・中所得国と同様に、ラオスにおいても、国内に大きな健康格差が見られる。西本らは、同じ県内にあり直線距離

で150kmも離れていない2つの地区(ラハナム地区とセボン地区)の乳幼児死亡率に、十倍以上の差があったことを報告している。死亡率が低いラハナム地区は、メコン河岸平野部にある水田耕作と対岸のタイへの出稼ぎが盛んな地区である。一方、死亡率が高いセボン地区は、ベトナム国境の山間部に位置し、焼畑耕作と若干の狩猟採集を組み合わせた自給の生業を営む民族が多数を占めている。

我々の研究チームは、セボン地区を主なフィールドとして、地域保健研究を行ってきた。この地区の住民は、自給自足的な生活を営む人々が多いので、我が国で用いられている世帯収入などの経済指標を用いて、経済状況を測定することは難しい。したがって我々は、テレビやオートバイ、家畜などの世帯資産の保有状況に基づくwealth indexを作成し、世帯の相対的経済レベルを測定している。セボン地区の特徴は第一に、相対的経済レベルと様々な健康

アウトカムの中に、強い関連が見出されることである。よって、貧困対策を無視して保健医療の大きな改善は望めないであろう。第二の特徴は、地域の文脈効果が高いことである。例えば、この地区には、トイレが全くない村が少なくない。したがって、糞便由来の感染症に対する、手洗いなどの衛生対策を個人でいくら頑張っても限界がある。

以上の特徴から、我々の研究チームは、経済や教育などの専門家と連携するように努めている。我々は、ラオスを研究フィールドとする日本人研究者から成るコンソーシアムを強化している。このコンソーシアムによって、他分野の専門家と交流しやすい環境が整いつつある。介入としては、個人単位ではなく村単位を対象とする介入を進めている。具体的には、ラオス農村では珍しい女性のコミュニティ・ヘルスワーカーの育成や、ポジティブ・デビアン手法を用いた衛生行動の村全体への普及などに取り組んでいる。

### ■プロフィール

1994年 明治大学農学部農学科卒業

2003～2005年 青年海外協力隊(ラオス、感染症対策)

2007年 JICA短期専門家(ガーナ、フィールド研究)

2009～2011年 国立国際医療研究センター国際保健医療  
研究部(現：疫学・予防研究部)流動研究員

2010年 JICA短期専門家(ニジェール、疫学統計)

2011年 東京大学大学院医学系研究科国際保健学専攻  
博士課程修了

2011年～ 琉球大学に勤務

## 疫学専門家が認定されました

疫学専門家・人材育成委員会委員長 浜松医科大学健康社会医学講座  
尾島 俊之

疫学専門家制度が発足し、下記の通り、初回の上級疫学専門家および疫学専門家の認定を無事に行うことができました。

### ■上級疫学専門家

申請：2019年8月19日～9月10日

合否発表：2019年11月15日

認定者数：207人

### ■疫学専門家

申請：2019年11月1日～11月20日

書類審査結果通知：2020年1月20日

筆記試験：2020年2月22日

(試験会場：京都大学吉田キャンパス)

合否発表：2020年3月6日

認定者数：36人

本制度は、会員の疫学に関わる知識および技量を、日本疫学会として評価し、認定することにより、会員の自己研鑽と質的向上を目指すとともに、疫学研究を遂行あるいは支援できる人材を養成し、社会に貢献することを目的としています。

疫学専門家認定条件である筆記試験は、『はじめて学ぶやさしい疫学 改訂第3版(南江堂)』を教科書として指定し、一部、テキストの範囲を超える問題も出題しました。単に、知識を暗記しているかを確認するだけでなく、実践の中での的確な疫学的判断ができるかをみることのできる応用問題を

なるべく作成していただくように依頼しました。幅広く疫学の知識や問題解決能力を確認することができる試験になったと考えています。

この制度発足および認定は、疫学専門家・人材育成委員会委員、出題委員、ブラッシュアップ委員、認定審査委員を始め多くの方々の力を結集して行うことができました。また、大勢の方に申請をいただきました。心より感謝申し上げます。この制度が、疫学者の活躍の場の広がり、質の高い疫学研究による人々の健康と幸福の向上に寄与することを期待しています。

## 事務局だより

### 1) 新事務局長紹介

今年の2月から事務局長を務めさせていただいております大阪大学環境医学准教授の北村哲久(通称：「Northern villageの



きたむら)です。日本疫学会には京都大学社会健康医学系専攻大学院生だった平成21年に入会させていただいてから10年以上経つのですが、私自身十分な

学会活動をしてこなかったため、これを読んでいる皆様におかれましてはきっと「北村って誰?」状態でかなり不安な状況です。新しく事務局長になるにあたってまずはそこを自省し、理事や監事の方々をはじめ会員の皆様方とも交流しつつ、これを機に日本疫学会のさらなる発展と充実のため、微力ながら日々努力していく所存です。

祖父江友孝・理事長の体制としては2期目に入りますが、前任者の喜多村祐里

先生が携わってきた事務局機能強化を引き継ぎつつ、広報活動、会員の交流・連携、学会の顔であるJEの編集・発刊を通じた学術活動、昨年発足した疫学専門家認定制度などのサポートをして参りますので、どうぞ皆様のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

事務局運営に携わってからまだわずかな時間ですが、東京事務局の西野雅子様、糟谷里美様、中川光穂様が多く事務処理をして日本疫学会を支えていた

だいていることに非常に感謝しつつ、私自身が足を引っ張らぬよう取り組んでいく必要を感じ、身が引き締まる思いです。

令和2年3月現在、新型コロナウイルス感染症が日本国内でも広がり、医療体制・社会生活・経済活動に大きな影響をもたらしており、多くのマスコミ報道の中で「疫学調査」という言葉を聞くようになりました。しっかりとした疫学調査の重要性を改めて認識するとともに、その中で日本疫学会の事務局運営に関わることに大切さを感じております。至らぬ点も多々あると思いますが、皆様のご指導・ご鞭撻をいただければ幸いです。

## 2) ご登録情報更新のお願い

昨年6月に、多様な背景をもつ会員の皆様の活動支援や環境整備と、疫学の

学際的な発展をめざして、会員登録票を改訂しました。更新いただいていない方は、会員専用サイト (<https://coco.cococica.com/jea/>) にログインし、「登録内容確認・変更」をクリックして、ご登録情報を更新してください。

※ログインIDは、ご登録のメールアドレスです。パスワードをお忘れの場合は、ログイン画面で再設定してください。

## 3) 日本疫学会奨励賞募集要項

日本疫学会奨励賞に関する細則にもとづき、以下の要件を満たす受賞者の推薦をお待ちしています。

- ・本会員のうち、優れた疫学的研究を行い、その成果を日本疫学会誌、Journal of Epidemiologyおよびその他の疫学関連学会や専門雑誌に発表

し、なお将来の研究の発展を期待しうる者(原則として個人)

- ・受賞者は継続3年以上の会員歴を持つ本学会会員に限られ、受賞の暦年度の募集締め切り日において満45歳未満の者
- ・推薦書の提出期限は5月1日～6月30日で、原則として代議員(役員経験者を含む)からご推薦いただくこととなっております。

※詳細は学会HP (<https://jeaweb.jp/activities/award/shorei/index.html>) をご覧ください。

## 4) 日本疫学会会員数：2,459名

(2020年4月1日現在)

名誉会員：33名 代議員：196名  
普通会員：2,230名

## 編集後記

皆様のご協力のお陰で、無事、疫学会ニュースレター第55号を編集することができました。ありがとうございました。そして、編集の時期(3月上旬)に以下の編集後記を書きました。『まさに今、新型コロナウイルス感染症が国内外の大きな問題となっています。大規模イベントの自粛、全国の小中高の休校、株価の下落、円高、移動の制限など、一つの感染症が保健医療のみならず、社会・経済も含めたグローバルな問題となること、さらには、それに対する仕組みをまだ我々は持ち合わせていないということも明らかとなりました。奇しくも、今回、グローバルヘル

スと疫学というタイトルの特集を組みました。疫学者は、グローバルな健康問題に如何に貢献できるか? Dr. John Snowによるコレラの疫学研究の初心に戻り、考え直す時かもしれません。このニュースレターが発行される頃には、新型コロナウイルス感染症が制圧に向かっていることを望みます。』

そして、このニュースレターの最終稿ができあがった2020年4月7日、東京、神奈川、埼玉、千葉、大阪、兵庫、福岡の7都府県に緊急事態宣言が発出されました。

(金子 聡)



新型コロナウイルス  
関連情報

### 【広報委員会より】

新型コロナウイルス関連情報特設サイト (<https://jeaweb.jp/covid/>) を、2020年3月2日に開設しました。現在、国内外において進められている新型コロナウイルス感染症対策に関する正しい理解のため、関連した疫学的用語や知識の解説、有用なリンクを掲載しています。

発行 一般社団法人 日本疫学会 〒113-0033 東京都文京区本郷7-2-2 本郷MTビル4階 ✉ [jea@jeaweb.jp](mailto:jea@jeaweb.jp)

©Japan Epidemiological Association All Rights Reserved.